

I 2017年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2017年度大学評価結果総評】

スポーツ研究センターはスポーツ科学に関する調査・研究、スポーツ施設を利用した実践活動のために設立された研究センターの使命として、多くの書籍・論文や学会発表・放送出演があることは高く評価される。しかし記載された情報には、著者名や発表者名等の情報が無いため、今後はセンターのどの所員の研究活動の成果物が明確にすることが望まれる。また外部資金は継続した科研費を4件獲得しているが、今後は、公的資金だけではなく民間研究資金獲得など継続した外部資金獲得の努力を期待したい。また本学のブランディング推進の一環として体育会強化に寄与するため、積極的な情報提供・科学的サポートの支援など、今後の具体的な成果に期待する。この際には、スポーツ・サイエンス・インスティテュート（SSI）の教育・研究に対する連携強化も視野に入れた取り組みも必要である。さらに、2015年10月にスポーツ庁が設立され、国としてのスポーツ振興策が強化された。そのような情勢を積極的にとらえて、国のスポーツ政策との協力をも視野に入れることを期待したい。また研究センターとしては、今まで以上に、地域に密着した社会貢献活動などの活性化の実現にも期待したい。また内部質保証委員会の組織、機能、活動方針などをより明確にし、今後の内部質保証活動の整備強化を図ることを期待したい。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

昨年度の評価において「研究活動の成果物を明確にすること」を指摘されたが、今後は研究成果に所員の氏名を記載することで明確にしたい。また質保証委員会については、昨年度に内規を策定し、本年度より施行する。外部資金の獲得については、科研費以外の民間研究資金を獲得している所員もおり、このような動きを研究センター内にて促進していきたい。昨年度より本学体育会強化に関する活動がスタートしたが、既に協力できる所員を募り、徐々に活動を展開している。今後はSSIとの連携も強化することで国のスポーツ振興策に準じながら、競技力強化のみならず、本学のブランディングに寄与できるように努めたい。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

スポーツ研究センターの研究活動の成果物について、2018年度の自己点検・評価シートでは所員の氏名が記載されており、各所員の活動分野や研究内容が把握しやすくなった。外部資金の獲得については、近年活発化しつつあり、また実績も上がりつつある様子が伺える。質保証委員会については2018年度から稼働開始とのことであり、その評価は来年度への申し送り事項としたい。体育会強化に関する活動は、2017年度に開始したとのことであり、2018年度中には、効果・成果のあり／なしを含めて結果が揃い始めると思われる。来年度の自己点検・評価の際に言及をお願いしたい。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、研究所（センター）の目的を適切に設定しているか。

①研究所（センター）として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。

はい いいえ

（～400字程度まで）※理念・目的の概要を記入。

本センターは、スポーツ科学の調査及び研究を目的としており、これを遂行するためスポーツに関する文献、資料の収集、保管をし、それを活用しながら研究を進め、その成果を公表することで社会に還元することを目指している。また体育施設の運営も目的の1つとして掲げており、体育施設の有効的な活用を通じ、体育会の強化はもとより、学生の健康増進にも貢献することを目指している。

②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。

（～400字程度まで）※検証を行う組織（各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

運営委員会を年間3回程度開催し、目的や具体的な事業の適切性について、所員間で意見交換を行っている。実際、適切性に鑑みて、法政大学スポーツ研究センター規程を、2013年度（2012年度中に改定を決定）と2015年度（2014年度中に改定を決定）に改定している。

1.2 大学の理念・目的及び研究所（センター）の目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

①どのように理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。

(～400字程度まで) ※具体的な周知・公表方法を記入。

法政大学スポーツ研究センターのホームページにおいて、法政大学スポーツ研究センター規程を公開している。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・研究と実践を繋げる環境が整備されている。また競技者(体育会所属学生)のみを対象としておらず、体育施設の利用などによって学生全般を対象とした研究結果を示している。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

スポーツ研究センターの運営目的は、スポーツ科学分野の調査・研究、関連文献の収集と保管、研究成果の対外公表を通じた社会還元、体育施設の運営、学生の健康増進など多岐にわたるが、これらのことはスポーツ研究センター規程内に明示され、センターのホームページにも掲載されており、社会に対して明確に公表されている。理念・目的の検証については、年3回程度の運営委員会開催を通じて意見交換が行われており、適切性に鑑みた規程の改定が数年に一度程度行われるなど、実効性を持った検証が行われている。

2 内部質保証

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム(質保証委員会等)を適切に機能させているか。

① 質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2017年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

第3回スポーツ研究センター運営委員会で、質保証委員会を設置することを決めた。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・スポーツ研究センター所員以外のメンバーを加えることで、より専門的にかつ客観的な評価を受けることを可能としている。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

2017年度第3回運営委員会において、質保証委員会の設置を決定したとのことであり、スポーツ研究センターを起点とした具体的な質保証のPDCAサイクルは、2018年度から稼働し始めるものと期待する。なお、委員会の構成メンバーにセンターの所員以外を加えたことは、外部の視点で客観的かつ的確な分析・評価を行い、しがらみのない助言や提言を行うという観点から望ましい人選といえ、今後の対応を見守りたい。

3 研究活動

【2018年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2017年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2017年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

・2017年度は以下の8のプロジェクトを実施した。

- ① 「指導者のリーダーシップのスタイルがジュニア・ウエイトリフティング選手の心理的側面に及ぼす影響」
- ② 「暑熱環境下における野球選手のコンディションとパフォーマンスの関係」
- ③ 「スポーツ関与とソーシャルインパクトに関する調査」
- ④ 「高強度・低反復回数筋運動が血管内皮機能に及ぼす影響」
- ⑤ 「大学生アスリートを対象とした大学スポーツにおけるインテグリティ」
- ⑥ 「チームの要因から競技へのコミットメントを予測することはできるか：UnityとCollective Efficacyの可能性」
- ⑦ 「法政大学硬式野球部における選手の睡眠状況の調査」
- ⑧ 「大学スポーツの大学ブランド力向上に対する影響」

これらのプロジェクトについては、本年度末に研究報告としてレポートを提出してもらい、所員間での相互理解を深めた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・【2017年研究プロジェクト】プロジェクト申請

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2017年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を簡条書きで記入。

1. 書籍

- ・ 『野球選手にみられる障害』、「疲労と身体運動」、杏林書院、東京、pp84-91, 2018. 投球を繰り返すことによる身体内および動作の変化、および青少年の投球・打撃動作とその繰り返しによる障害について / 平野 裕一
- ・ 『基礎から学ぶスポーツトレーニング理論』（出版物）、2017年12月、日本文芸社（全271頁） / 伊藤 マモル
- ・ 『平成29年度 共生社会の実現に向けた障害者の余暇支援事業セミナー 障害のある人たちの余暇支援を考える～やわらかな「こころ」、やわらかな「からだ」～報告書』（出版物）、他、2017年12月20日、P.40-P.44 身体表現ワークショップ報告 / 越部 清美
- ・ 『放送席からみた日本代表の進化論』、2017年4月1日、祥伝社 / 山本 浩
- ・ 『レジャー白書2017』、2017年、第8章スポーツとメディアの中で、スポーツ観戦とメディア、スマートスタジアムの2節を担当 / 井上 尊寛
- ・ 『よくわかるスポーツマーケティング』、2017年10月、第4章スポーツ市場の理解の中で、第2節スポーツ市場の構造と規模、第3節スポーツプロダクトの種類、第12章観戦型スポーツの消費者の中で、第1節観戦型スポーツの分類、第3節スポーツ観戦動機を担当 / 井上 尊寛
- ・ 『正しい走り方講座：改訂版』スタジオタッククリエイティブ 2018年3月 / 杉本 龍勇
- ・ 『スプリント学ハンドブック：すべてのスポーツパフォーマンスの基盤』西村書店、13章担当 pp156-165 2018年2月 / 杉本 龍勇

2. 論文

- ・ 『柔道授業の初習段階における学習順序の違いが生徒の学習成果に及ぼす影響』（原著論文）、2018年3月、武道学研究50(3)、pp.149-158 / 永木 耕介
- ・ 『外国語による言語活動を導入したスポーツ演習科目の試み—大学における外国人留学生が日本語を介して学習する「柔道・JUDO」の授業計画案—』（研究ノート）、2018年3月、スポーツ健康学研究9、印刷中 / 永木 耕介
- ・ 『中学生期におけるトップ野球選手の成熟度』、発育発達研究、74:26-33, 2017. PHV年齢および生まれ月の観点から中学生期の男子トップ野球選手の成熟度について / 平野 裕一
- ・ 『日本人トップアスリートの海外遠征とコンディショニング—質問紙調査の結果から—』、日本臨床スポーツ医学会誌、25(3):435-444, 2017. 時差のある国へ海外遠征を行う日本のトップアスリートたちのコンディショニングについて / 平野 裕一
- ・ 『走幅跳の試技前に行う全力疾走が助走および跳躍距離に与える即時的影響』、トレーニング科学、29(1):23-31, 2017. 走幅跳の試技前に全力疾走を行うことが助走および跳躍距離に与える影響について / 平野 裕一
- ・ 『日本野球科学研究会のopen化』、野球科学研究、1:1-3, 2017. 野球科学研究会をオープンにするための方策とその

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

ための私の役割について / 平野 裕一

- 『青年期における垂直跳びの跳躍高調節能力と各就学年代の運動量との関係』, 2017年3月, 体育測定評価研究 17: P. 37-P. 46, / 林 容市
- 『サッカー審判員の活動形態とファウルの判定精度について』, 2018年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 36: P. 69-P. 78, / 林 容市
- 『過去の運動習慣が大学生の在校動に及ぼす影響』 2018年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 36: P. 79-P. 87, / 林 容市
- 『高齢競歩実践者におけるADL能力と転倒関連体力との関連』 2018年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 36: P. 87-P. 92, / 林 容市
- 『運動経験によるグレーディングの変化』 2017年12月, 体育の科学 67:P. 820-P. 825, / 林 容市
- 『フェンシング選手のパワーおよびアジリティ能力の測定結果』, 2017年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 36号 31-35 / 伊藤 マモル
- 『学生の体育会活動に対する意識調査』 法政大学スポーツ研究センター紀要 36 pp37-49 / 伊藤 マモル
- 『大学野球選手における24時間のエネルギー消費量はポジションで異なる—各ポジション1名ずつによるPilot study—』 2017年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 36号 55-58 / 伊藤 マモル
- 『大学野球選手のコンディションに関する研究』 2017年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 36号 101-113 / 伊藤 マモル
- 『The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences.』 European Journal of Physical Education and Sport Science, 3(7), P. 38-P. 50, 2017年6月 / 荒井 弘和
- 『大学生アスリートにおけるギャンブル行動およびその関連要因の調査』 2017年7月, 保健の科学, 59, P. 491-P. 495 / 荒井 弘和
- 『学齢期の組織的スポーツ参加と成人期のスポーツ関与の関連: 回顧的データに基づく持ち越し効果の検討』 2017年7月, スポーツ産業学研究, 27, P. 245-P. 256 / 荒井 弘和
- 『運動部活動顧問の時間的・精神的・金銭的負担の定量化』 2017年7月, スポーツ産業学研究, 27, P. 299-P. 309 / 荒井 弘和
- 『大学生アスリートが考えるメンターと競技・日常生活で求めるメンタリング』 2018年1月, スポーツ産業学研究, 28, P. 75-P. 84, 2017年7月 / 荒井 弘和
- 『運動部活動の充実に向けて校長が重要視している取り組みの探索—中学校校長へのインタビュー調査に基づく質的研究—』 2017年9月, 順天堂スポーツ健康科学研究 8 (2) P. 33-P. 43 / 山田 快
- 『The Effect of Unity in Sport Teams on Athletes' Mental Health: Investigating the Mediating Role of Resilience』 2017年4月, International Journal of Sport and Health Science 15 P. 55-P. 64 / 山田 快
- 『エリートスイマーのメンタルタフネス尺度開発』 2017年3月, スポーツ産業学研究 27 (3) P. 203-P. 221 / 山田 快
- 『男子バレーボールにおける攻撃パターンについての研究』 法政大学スポーツ研究センター紀要第 36号、93-99, 2018・3. / 山田 快
- 『男子バレーボールにおける攻撃パターンについての研究』 法政大学スポーツ研究センター紀要第 36号、93-99, 2018・3. / 吉田 康伸
- 『企業で働く精神障害者の機能的自我状態とソーシャルスキルの関係 - 2波のパネル調査による双方向の影響関係の検討 - 』, 2017年12月31日, 交流分析研究第42巻第2号, p. 68-78. / 中澤 史
- 『ミニゲームを用いたサッカー選手の認識と生理反応』, 2018年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要 36, P. 1-14. / 中澤 史
- 『スポーツの緊張場面における重心の変動と心理状態の関係』 2018年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要 36, P. 15-19 / 中澤 史
- 『青年期男子における特性的自己効力感と関連するスポーツ活動の特徴』 2017年4月, 体力研究, 115巻, pp. 8-14. / 越智 英輔
- 『Effect of eicosapentaenoic acids-rich fish oil supplementation on motor nerve function after eccentric contractions』 2017年6月, Journal of the International Society of Sports Nutrition, 12, eCollection. / 越智 英輔
- 『パワーリフティング選手における筋力トレーニングが動脈コンプライアンスに及ぼす影響 : 横断及び1年間の縦断

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

研究』2017年12月, 運動とスポーツの科学, 23巻1号, pp.9-16. / 越智 英輔

- 『Effects of the ACTN3 R577X genotype on the muscular strength and range of motion before and after eccentric contractions of the elbow flexors』2018年2月, International Journal of Sports Medicine, 39(2), pp.148-153 / 越智 英輔
- 『伸張性収縮における筋線維の動員と筋損傷との関連性』2018年3月, 運動とスポーツの科学, 23巻2号, pp.89-94. / 越智 英輔
- 『大学野球選手における股関節可動域と肩関節可動域の関連』日本アスレティックトレーニング学会誌, 2017 / 泉 重樹
- 『学生の体育会活動に対する意識調査』法政大学スポーツ研究センター紀要36 pp37-49 2018年3月 / 泉 重樹
- 『野球選手の肩肘痛に対するセルフチェックの有用性』JAN, 2018/ 泉 重樹
- 『Consumer experience quality: A review and extension of the sport management literature』2017年11月, Sport Management Review, 20(5), 427-442. / 吉田 政幸
- 『A model bridging team brand experience and sponsorship brand experience』2017年11月, International Journal of Sports Marketing and Sponsorship, 18(4), 380-399. / 吉田 政幸
- 『Event satisfaction, leisure involvement, and life satisfaction at a walking event: the mediating role of life domain satisfaction』2017年9月, Leisure Studies, 36(5), 605-617. / 吉田 政幸
- 『スポーツファンの誇り: プロサッカーとプロ野球における検証』2017年5月, スポーツマネジメント研究, 9(1):3-21. / 吉田 政幸
- 『大学野球選手における24時間のエネルギー消費量はポジションで異なる—各ポジション1名ずつによるPilot study—』2017年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要36号 55-58 / 杉本 龍勇
- 『学生の体育会活動に対する意識調査』法政大学スポーツ研究センター紀要36 pp37-49 2018年3月 / 杉本 龍勇

3. 学会発表

- 『垂直跳び高の調節課題と選択反応課題との複合テストの試作』日本体育学会第68回大会, 2017年9月9日 / 林 容市
- 『体育で共用されるスポーツ用具に分布する細菌について』2017年11月18日, 第28回日本臨床スポーツ医学会学術集会 / 伊藤 マモル
- 『女子大学生アスリートは化粧行動を行っているのか?』, 日本健康心理学会第30回記念大会, 2017年9月2~3日, 明治大学(東京都), / 荒井 弘和
- 『武道種目に取り組む者は対戦相手との握手行動を実施しない』, 日本体育学会第68回大会, 2017年9月8~10日, 静岡大学(静岡県) / 荒井 弘和
- 『生まれながらのリーダーはいない—スポーツチームのキャプテンは何を経験しているのか—』日本スポーツ心理学会44回大会, 2017年11月24~26日, 大阪商業大学(大阪府) / 荒井 弘和
- 『チームの要因から競技に対するコミットメントを予測する—ユニティとコレクティブ・エフィカシーの有用性—』, 日本スポーツ心理学会・第44回大会, 2017年11月25日, 大阪商業大学(大阪府) / 荒井 弘和
- 『身体表現の教育と人間形成に関する研究(5)』, 日本体育学会第68回大会, 2017年9月9日, 静岡大学(静岡県) / 越部 清美
- 『高校運動部員用礼儀マナー尺度の開発とその妥当性と信頼性の検討』, 日本体育学会第68回大会, 2017年9月9日, 静岡大学 / 中澤 史
- 『高校運動部員用礼儀・マナー尺度の開発』, 日本スポーツ心理学会第44回大会, 2017年11月25日, 大阪商業大学 / 中澤 史
- 『ジュニアサッカー選手の心理特性に関する検討』九州スポーツ心理学会第31回大会, 2018年3月4日, 佐賀大学 / 中澤 史
- 『ジュニアサッカー選手のパーソナリティに関する検討—競技レベル、学年、ポジションに着目して—』九州スポーツ心理学会第31回大会, 2018年3月4日, 佐賀大学 / 中澤 史
- 『指導者の指導スタイルと社会的スキルの関連—高校ウェイトリフティング選手を対象に—』九州スポーツ心理学会第31回大会, 2018年3月4日, 佐賀大学 / 中澤 史
- 『大学生運動部員版礼儀・マナー尺度の項目検討—運動部活動場面とその他の生活場面の関連に着目して—』九州スポーツ心理学会第31回大会, 2018年3月4日, 佐賀大学 / 中澤 史

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 『チームの要因から競技に対するコミットメントを予測する—ユニティとコレクティブ・エフィカシーの有用性—』, 日本スポーツ心理学会・第44回大会, 2017年11月25日, 大阪商業大学(大阪府) / 山田 快
 - 『エイコサペンタエン酸(EPA)の摂取が伸張性収縮運動後の筋損傷に及ぼす影響』, 第71回日本栄養・食糧学会大会, 2017年5月, 沖縄コンベンションセンター(沖縄県) / 越智 英輔
 - 『Effect of eicosapentaenoic acid supplementation on biochemical markers after eccentric contractions』, Experimental Biology 2017, 2017年4月, Chicago (USA) / 越智 英輔
 - 『伸張性収縮運動による筋線維の動員は筋損傷と関連する』, 2017年12月, 神戸ファッションマート(兵庫県), NSCA S&Cカンファレンス2017 / 越智 英輔
 - 『拮抗筋の鍼刺激により主導筋に筋出力は向上するか(第2報)』, 第66回全日本鍼灸学会 学術大会, 2017年6月10-11日, 東京, / 泉 重樹
 - 『スポーツ系学部新入生の機能的動作評価』, 第72回日本体力医学会学術大会, 2017年9月16-18日, 松山市 / 泉 重樹
 - 『筋タイトネステストにおける院体操競技選手の左右差の検討』, 第72回日本体力医学会学術大会, 2017年9月16-18日, 松山市 / 泉 重樹
 - 『Usefulness of self-check for elbow and shoulder pain in adolescent baseball players』, ECSS, ドイツ2017 / 泉 重樹
 - 『Association between glenohumeral joint rotational range of motion and hip joint flexibility in early adolescent baseball players』, ACK, 韓国2017 / 泉 重樹
 - 『呼気ガス分析によるアシストスーツの有効性の検証』, 第30回バイオエンジニアリング部門講演会, 2017年12月14日, 京都大学・百周年時計台記念館(京都府) / 高見 京太
 - 『オリンピック開催に伴って知覚されたスポーツ・レガシーにはどのような要素があるのか?』, 日本体育学会 第68回大会, 2017年9月10日, 静岡大学(静岡県) / 高見 京太
 - 『Using hallmark sport events to internationally brand your city: Measuring the effects of the Tour de France on the brand of the city of Utrecht in nine different nations』 The 32nd Conference of the North American Society for Sport Management, 2017年6月, Denver, CO, USA / 吉田 政幸
 - 『Leveraging events for sport participation: The case of the Japanese National Sports Festival』 The 32nd Conference of the North American Society for Sport Management, Denver, CO, USA / 吉田 政幸
 - 『観戦者のスポーツ関与に関する研究』, 日本スポーツマネジメント学会第10回大会, 2018年3月5日, 早田大学(東京都) / 吉田 政幸
 - 『オリンピック開催に伴って知覚されたスポーツ・レガシーにはどのような要素があるのか?』, 日本体育学会 第68回大会, 2017年9月10日, 静岡大学(静岡県) / 山本 浩
 - 『観戦者のスポーツ関与に関する研究』, 日本スポーツマネジメント学会第10回大会, 2018年3月5日, 早田大学(東京都) / 井上 尊寛
 - 『Prior aerobic exercise attenuates prolonged sitting-induced leg endothelial dysfunction』, 64th Annual Meeting of American College of Sports Medicine. 2017年5月, 米国コロラド州デンバー / 森嶋 琢真
 - 『立位は脚部の血管内皮機能を変化させない』, 第25回日本運動生理学会大会, 2017年7月, 横浜市 / 森嶋 琢真
 - 『事前の運動は座位誘発性の血管内皮機能の低下を予防する』, 第72回日本体力医学会大会, 松山市 / 森嶋 琢真
4. 研究プロジェクト、セミナー、シンポジウムへの参加
- 『東京学生柔道連盟海外研修』(団長), 2018年3月2日~3月10日, (ワシントンDC・ニューヨーク), アメリカにおける柔道交流についてジョージタウン大学ワシントン柔道クラブと海軍士官学校柔道クラブを対象に現状の報告, / 鈴木 良則
 - 『平成29年度子供の体力向上(ボール投げ・握力向上)課題対策プロジェクト1』(プロジェクト), 2017年8月—2018年3月, 文部科学省会議室(東京都)ほか, 子どもの投力・握力向上, 児童生徒の体力向上, 特に投力・握力向上に関する方略の獲得に向け / 山田 快
 - 『DANCE POEM Part 1』(プロジェクト), 2017年5月4日, めぐるパーシモンホール 小ホール, 身体表現の可能性を探る, DANCE PATIO 22に参加し, 作品を創り演舞 / 越部 清美
 - 『障害のある人たちの余暇支援を考える』(セミナー), 2017年9月23日, 全国障害者総合福祉センター(戸山サンライズ), やわらかな「こころ」・やわらかな「からだ」 / 越部 清美
 - 『女性のボディワーク教室』(セミナー), 2018年1月11日, 18日, 特別養護老人ホーム 椿 5階多目的ホー

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

ル、まちだの体力向上プロジェクト、地域住民を対象とした女性のボディワーク教室 / 越部 清美

- ・『DANCE POEM Part 2』(プロジェクト), 2018年3月28日, 国立新美術館, 身体表現と空間とモノとのかかわりを探る, 第71回日本アンデパンダン展 / 越部 清美
- ・『第3回スポーツ心理臨床研究会』(話題提供), 2017年9月2日, 関西国際大学(兵庫県), 『「エゴグラム」活用の実際～アスリート理解と心理支援を通じて～』 / 中澤 史
- ・『日本脂質栄養学会第26回大会ランチョンセミナー』(セミナー), 2017年9月23日, 学術総合センター一橋講堂(東京都) / 越智 英輔
- ・スポーツ現場において鍼灸師が対応すべきポイント～他職種連携のコツ～, 全日本鍼灸学会中国四国支部認定講習会, 2017年7月9日, スポーツ選手の治療に関わっている鍼灸師に向けたセミナー / 泉 重樹
- ・スポーツ現場における鍼灸の得手と不得手～アスレティックトレーナーとの違いから～, 神奈川県鍼灸師会 学術講習会, 2017年4月9日, 今後スポーツ選手の関わりたい鍼灸師およびスポーツに現在も関わっている鍼灸師に向けたセミナー / 泉 重樹
- ・『まちだ市民大学HATS』(セミナー), 2017年5月10日, 町田市生涯学習センター(東京都), “こころ”と“からだ”の健康学 元気に生きるための知識と実践[全7回], カリキュラム作成と第1回目の講義 / 高見 京太
- ・『平成29年度JOCナショナルコーチアカデミー』(アカデミー) 2017年7月5日, 味の素ナショナルトレーニングセンター大研修室 テーマ:「メディアと向き合う」 / 山本 浩
- ・『平成29年度静岡県市町議会議員研修会』[セミナー] 2017年8月17日, 静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ 中ホール, テーマ:「東京オリンピック・パラリンピックやラグビーワールドカップをチャンスとした地域活性化」 / 山本 浩
- ・『スポーツ推進フォーラム』(シンポジウム) 2017年8月19日, 八王子市芸術文化会館(東京都) テーマ:「スポーツで変わる! 未来の八王子」 / 山本 浩
- ・『筋力トレーニング後における有酸素性運動が血管内皮機能に及ぼす影響』2018年3月1日～2018年3月31日, 法政大学(東京都) / 森嶋 琢真
- ・『野球のコンディショニングに有効な指標の探索に関する研究』2018年2月11日～現在, 法政大学(東京都) / 森嶋 琢真
- ・『筋力トレーニングの科学、パワーの科学』 本学硬式野球部を対象に 2017年7月16・19・22日, 法政大学(神奈川県) / 森嶋 琢真
- ・『競技力向上のためのマネジメント』 國學院大學人間開発学会第9回大会 公開シンポジウム 2017年11月11日, 國學院大學たまプラーザキャンパス / 杉本 龍勇

5. コラム(新聞、刊行物)、テレビ出演、ラジオ出演など

- ・『大相撲の暴力問題』(評論記事), 2017年12月21日, 共同通信社(オピニオン欄用) / 山本 浩
- ・『敗者が育てる勝者～ドイツで見た敗北の流儀～』(評論記事) 2018年2月20日, 共同通信社(オピニオン欄用) / 山本 浩
- ・『ドイツスポーツ界のなるほど』(テレビ解説) 2017年11月11日, NHK(「視点・論点」総合テレビ、E-テレ) / 山本 浩
- ・『W杯枠拡大を選択したFIFAの思惑』(ラジオ解説), 2017年5月23日, NHK(「社会の視点・私の見方」ラジオ第一放送) / 山本 浩
- ・静岡新聞社(朝刊)時評「プロ選手か、企業選手か」2017年1月19日 / 杉本 龍勇
- ・静岡新聞社(朝刊)時評「基本練習の重要性」2017年3月15日 / 杉本 龍勇
- ・静岡新聞社(朝刊)時評「大学スポーツのビジネス化」2017年5月4日 / 杉本 龍勇
- ・静岡新聞社(朝刊)時評「タレント発掘事業」2017年6月24日 / 杉本 龍勇
- ・静岡新聞社(朝刊)時評「スポーツ観戦の成熟度」2017年8月23日 / 杉本 龍勇
- ・静岡新聞社(朝刊)時評「若年層の体力低下」2017年10月12日 / 杉本 龍勇
- ・静岡新聞社(朝刊)時評「今後のスポーツ施設」2017年11月30日 / 杉本 龍勇
- ・静岡新聞社(朝刊)時評「部活動の時間制限」 2018年3月28日 / 杉本 龍勇

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2017 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2017 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。

- ・引用文献件数 68 件

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

（～400 字程度まで）※2017 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

現在は外部からの評価は受けていない。執行部および質保証委員会による議論をし、評価してもらう外部組織を選定し、評価を依頼するように努めたい。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2017 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2017 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。

【2017 年度中に応募した科研費等外部資金】

- ・科研費
 挑戦的研究（萌芽）3 件
 基礎研究（C）9 件
 若手研究（B）2 件
- ・スポーツ医・科学研究事業、（財）日本体育協会 1 件
- ・ヤマハ発動機スポーツ振興財団 1 件
- ・明治安田厚生事業団若手研究者のための健康科学研究助成 1 件

【2017 年度中に採択を受けた科研費等外部資金】

- ・科研費
 基礎研究（c）2 件
 基盤研究（B）1 件
 挑戦的萌芽研究 2 件
 若手研究（B）1 件
- ・平成 30 年度 スポーツ医・科学研究事業、（財）日本体育協会 1 件
- ・日本水産株式会社 2 件
- ・株式会社 J リーグデジタル 1 件
- ・明治安田厚生事業団若手研究者のための健康科学研究助成 1 件
- ・ヤマハ発動機スポーツ振興財団 YMFS スポーツチャレンジ助成 1 件

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

スポーツ研究センターでは 2017 年度中に、8 本の調査研究プロジェクトを実施したほか、8 編の書籍執筆、40 編超の論

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

文公表、30編超の学会発表、20件近くの研究プロジェクト・セミナー・シンポジウム等での発表・報告に加え、新聞等でのコラム掲載も12件あり、限られた所員数と予算の中で、研究・教育活動が大変活発に行われている。外部資金への応募も積極的に行っており、採択状況も良好である。科研費等公的資金の大幅な増額が今後見込めない中で、民間財団等の研究助成への応募を積極的に行い、複数の資金源確保に努めていることは大いに評価できる。一方で、センター外部からの第三者評価を受ける仕組みが現時点では整備されていないため、この点については2018年度の質保証委員会の活動に期待したい。

4 教育研究等環境

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどの教育研究支援体制はどのようになっていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※教育研究支援体制の概要を記入。

2017年度に専任研究員を採用し、体育会の強化に直接関わるのと同時にコーディネーターとしての役割を担い、強化に携わる各所員の活動をマネジメントしている。またその活動に伴う研究を進め、学会発表や学術誌への投稿など、外部への情報発信も行う。

【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

専任研究員を採用した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・専任研究員を配置することにより、本学のブランディング向上に寄与するための体育会強化に多くの時間を割くことが可能となり、今後の競技力向上に対して効果的なアプローチができる。また研究センターが今まで行ってきたデータ収集などの業務を担うことができ、今後の所員の研究データ利用に貢献することができる。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

2017年度に専任研究員を新たに採用したことで、体育会の強化のみならず、所員の研究推進に寄与する各種の補助やサポートが受けられるようになり、センターの教育研究支援体制が従前よりも充実し、今後の教育・研究面での生産性向上が期待される。採用した研究員の年齢や任期などは不明であるが、採用した研究員の処遇やキャリア育成にも普段から注意を払い、働きやすい職場環境作りに注意を向けて頂きたい。

5 社会連携・社会貢献

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

例年、公開講座を実施しており、地域のスポーツ振興に貢献している。2017年度の開催実績として以下の通りである。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

バドミントン（多摩地区）
 テニス（多摩地区）
 サッカー（多摩地区）
 野球（小金井地区）
 駅伝（小金井地区）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・毎年開催しているため、認知度は高く、参加者からも高い評価を得ている。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

2017年度のスポーツ研究センターの活動としては、バドミントン、テニス、サッカー、野球、駅伝の五つの公開講座を実施し、地域振興と社会還元の両方に寄与しているほか、大学の認知度・イメージ向上にも貢献している。このような活動を今後も是非継続して頂きたい。なお一部の講座については、研究センターホームページ上で動画が公開されており、講座の様子が外部の方でも確認できるようになっているが、全件は公開されていないように思われる。大学およびセンターのプレゼンス向上のためにも、可能な限り多くの講座の実施履歴と動画もしくは写真を、ホームページ上で公開することが望ましい。

6 大学運営・財務

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の役職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

① 所長（センター長）をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

はい いいえ

(～200字程度まで) ※概要を記入。

スポーツ研究センターに所長1名、副所長1ないし2名、所員等をおき、運営委員会を組織している。さらに、法政大学スポーツ研究センター規程を定め、規程に則って、運営委員会を年間3回程度開催している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・所員の研究に関する専門分野は多岐にわたり、スポーツ分野の多様性に対応できる。所員の協働により、新しい視点でスポーツにおける包括的な研究を行える可能性を有している。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

スポーツ研究センターには、所長1名、副所長1～2名、所員若干名とする所要の職が置かれている。運営委員会はこちら

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

らの構成員と、委嘱された本学教員、担当理事、保健体育部長を含んだ組織となっている。センターの構成員や運営委員会の構成、およびそれらの任務については、スポーツ研究センター規程第4条～第9条に定められており、必要な規程は整備されている。委員会は年度毎に3回程度開催され、センターの運営に必要な情報の提供、意見交換、意思決定は適切に行われていると推察される。

III 2018年度中期・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。
	年度目標	研究センター内での勉強会やセミナーを開催し、各所員の研究についての理解を深めると同時に、意見交換を通じてまた新たなアイデアの創出に努める。そして、研究における連携及び相互作用について確認する。
	達成指標	研究センター内での勉強会およびセミナーの開催。また、共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部助成金への申請を準備する。
No	評価基準	社会貢献・社会連携
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上貢献する。
	年度目標	法政スポーツが、競技力および社会性の両側面で高い評価を受けるように学生アスリートの強化・育成に励み、外部からの評価が向上するように努める。
	達成指標	SSI科目として新設された「オリンピック・パラリンピックを考える」に複数の所員が登壇することで、センターの多様な研究成果を学生アスリートに還元する。

【重点目標】

<研究活動>

研究センター内での勉強会およびセミナーの開催は、年間2～3回を目標としたい。まずは任意で研究センター所員から参加者を募り、サロンの形でスタートしたい。また各回につき、発表テーマを2つ程度設け、それぞれの発表に対する議論を深めるように努める。そして次年度以降に外部からの研究者も招聘できるように形を整えたい。

【2018年度中期・年度目標の大学評価】

スポーツ研究センターにおける研究活動に関する中期・年度目標については、所員間の協働と、それによるシナジー効果の創出、新たな価値の創造を目標に掲げ、そのための施策としてセミナーや勉強会の開催、共同プロジェクトの構築などを挙げている。これらの内容は具体的かつ適切である。社会貢献、社会連携に関する中期目標については、公開講座の継続、体育会の強化、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上、およびそれに伴う大学のブランドイメージ向上などを掲げており、これらの内容は適切である。一方、年度目標については、「外部からの評価向上」という、達成の有無や程度の評価が難しい内容が含まれているため、より具体性がある客観的な評価が可能な項目であるとなおよいと思われる。

【大学評価総評】

調査研究、学生の健康維持増進、体育施設の運営など、スポーツ研究センターの従前からの任務に加え、近年は体育会の強化、大学のイメージやプレゼンスの向上、社会や地域への貢献と還元なども任務や期待に加わり、スポーツ研究センターの重要性は年々増す一方で、所員の負担も増していると推察される。人的資源や予算も限られた厳しい環境下において、数多くの書籍や論文の執筆、放送への出演をこなしつつ、外部資金の獲得も精力的に行っていることは、バランスの取れた運営という点で多に評価できる。また、各種の公開講座も毎年継続して行っており、地域貢献の点でも評価できる。今後の動向を注視したい項目として、1. 質保証委員会の稼働、2. 所員間の協働、の2点を挙げ、また改善課題として、3. 情報発信、特にセンターホームページの充実、を挙げる。1. は2018年度の稼働開始が予定され、2. は中期目標・年度目標に掲げられている。3. については、例えば所員による新聞掲載やテレビ出演、大規模なセミナーや公開講座などの講演履歴をセンターホームページに掲載するだけでも効果があると思われるので何らかの対応を期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。